

【実践報告 2】

「自立と体験1」4年間を振り返って — 授業改善の視点から —

百木 英明*

はじめに

「自立と体験1」を実施して、今年度で4年を経過した。現在在籍する殆どの学生は、「自立と体験1」を履修したことになる。わずかではあるが、「自立と体験1」のプログラムによる学生の変化が見て取れる。「自立と体験1」の実施に関しては、既に、「明星大学明星教育センター研究紀要」の1号から3号に、榎本氏、鈴木氏から「実践報告」として掲載されている。ここでは、紙幅の関係もあり、この4年間でどのような成果が見られるかを、主に4年分の「学生アンケート」を中心に考察する。

4年間の成果

1. 改善の成果

表1 「ためになったと感じる授業」

実施回数	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回 (ローテーション)	第7回 (ローテーション)	第8回 (ローテーション)	第9回 (ローテーション)	第10回 (ローテーション)	第11回	第12回	第13回	第14回	第15回	総回答数	一人あたりの 回答数	
平成22 年度	実施内容	オリエンテーション	新しい環境で他者と出会い	他者と接し交流する	課外活動を知る(1)	課外活動を知る(2)	図書館にふれる	大学施設にふれる	マナーについて考える	私の通う大学を知る	自分や相手の大切さを知る(1)	自分や相手の大切さを知る(2)	卒業生から学ぶ	卒業生の自分をイメージする	学生生活をデザインする	まとめ	5447	3.2
	人数 n=1715	370	484	714	181	153	438	396	463	233	350	313	407	369	237	339		
	回答率	21.6%	28.2%	41.6%	10.6%	8.9%	25.5%	23.1%	27.0%	13.6%	20.4%	18.3%	23.7%	21.5%	13.8%	19.8%		
順位	第7位	第2位	第1位	第14位	第15位	第4位	第6位	第3位	第13位	第9位	第11位	第5位	第8位	第12位	第10位			
平成23 年度	実施内容	オリエンテーション	新しい環境で他者と出会い	他者と接し交流する	聞いて相手を理解する(1)	聞いて相手を理解する(2)	図書館にふれる	大学施設にふれる	課外活動を知る	私の通う大学を知る	自分や相手の大切さを知る	ルールとマナーを考える	卒業生から学ぶ	仕事と自分について考える	学生生活をデザインする	未来の自分へのメッセージ	9921	5.5
	人数 n=1820	523	674	778	793	700	621	569	388	485	808	855	638	784	689	616		
	回答率	28.7%	37.0%	42.7%	43.6%	38.5%	34.1%	31.3%	21.3%	26.6%	44.4%	47.0%	35.1%	43.1%	37.9%	33.8%		
順位	第13位	第8位	第5位	第3位	第6位	第10位	第12位	第15位	第14位	第2位	第1位	第9位	第4位	第7位	第11位			
平成24 年度	実施内容	オリエンテーション	新しい環境で他者と出会い	大学での学びを考える	聞いて相手を理解する(1)	聞いて相手を理解する(2)	明星大学を知る(合同授業)	明星大学を紹介する	図書館にふれる(合同授業)	大学職員に取材する	自分や相手の大切さを知る	ルールとマナーを考える	卒業生から学ぶ	仕事と自分について考える	これからの大学生活を描く	未来の自分へのメッセージ	9037	5.2
	人数 n=1742	498	723	462	750	663	469	247	563	494	730	665	605	760	791	617		
	回答率	28.6%	41.5%	26.5%	43.1%	38.1%	26.9%	14.2%	32.3%	28.4%	41.9%	38.2%	34.7%	43.6%	45.4%	35.4%		
順位	第11位	第5位	第14位	第3位	第7位	第13位	第15位	第10位	第12位	第4位	第6位	第9位	第2位	第1位	第8位			
平成25 年度	実施内容	オリエンテーション	新しい環境で他者と出会い	大学での学びを考える	聞いて相手を理解する(1)	聞いて相手を理解する(2)	明星大学を知る(合同授業)	明星大学を紹介する	図書館にふれる(合同授業)	大学職員に取材する	自分や相手の大切さを知る	ルールとマナーを考える	卒業生から学ぶ	仕事と自分について考える	これからの大学生活を描く	未来の自分へのメッセージ	8939	5.1
	人数 n=1760	432	657	461	759	677	369	273	530	468	788	683	589	788	851	614		
	回答率	24.5%	37.3%	26.2%	43.1%	38.5%	21.0%	15.5%	30.1%	26.6%	44.8%	38.8%	33.5%	44.8%	48.4%	34.9%		
順位	第13位	第7位	第12位	第4位	第6位	第14位	第15位	第10位	第11位	第2位	第5位	第9位	第2位	第1位	第8位			

上記表1は、年度毎の最終回に、学生に「ためになったと感じる授業」について問うた結果である。学生が「ためになった」と感じる項目が、平成22(2010)年「他者と接し交流する」から、翌年は「ルールとマナーを考える」へ、更に平成24・25(2012・2013)年は「これからの大学生活を描く」へとシフトしている。

(1) 積極的改善の取り組み

平成22(2010)年度は、全学科で前半の「他者と接し交流する」「新しい環境で他者とであう」を学生が選んでいる。翌年からの変化には、明星教育センター教員による積極的な改善を実施したことによる。それは、後半の授業では、

* 教育学部 常勤准教授 明星教育センター

学生の関心が上がらず、授業への積極的な取り組みと出席率での低下という現象を来した。そこで、①全体構成を見直し、関連をもたらずテーマ毎に、二節・三節の充実を図った。②キャリアの視点を盛り込んだ。③教員へは、実施前の事前説明会に加え、独自に第三節の説明会を実施したことがあげられる。一方で、50名近い教員の協力のもとに遂行される「自立と体験1」のプログラムは、教案を基に、各教員の創意工夫が加味されて毎回の授業が行われる。不備、気づいた点があれば、素早く対応する必要から、金曜日・土曜日の授業実施に合わせ、金曜日の「自立と体験1」終了後には、ランチミーティングで教員からの感想・改善点、効果的な実践例等を話し合い、ニュースレター発刊で、担当教員へ注意点・次回の案内等をメールで送信し、共有化を図り、不断の改善に努めている。

前期終了後は、次年度に向けての改善への取り組みへ着手し、学生アンケートの他に、教員からのアンケート、SA/TAによるアンケート、職員からのアンケートを実施し、その結果を基に改善を図っている。その一例として、学生へ配布し毎時間活用するポートフォリオと教案とが年々ページ数が増えている。平成22年度48ページからのポートフォリオは、平成25年度には86ページに増やし、教案も15ページから57ページへと充実させた。

こうした改善への結果を、表1からみてとれる。学生からは、1回から15回を通して「為になったと感じる授業」と感じた項目を、15回終了時に数に制限なく選択するアンケートを行った。平成22年度の平均解答項目数は3.2であったが、平成23年度以降の平均は、5.3,5.2,5.1へと増加した。更に、平成22年度に一番多くの回答項目であった「他者と接し交流する」が714(41.6%)であったのが、平成23年度以降では、700を超えた項目数が、平成23年度6項目、平成24年度5項目、平成25年度4項目へと増加した。500人以上の学生から「ためになった」との回答項目数では、平成22年度の1項目が、平成23年度13項目、平成24年度10項目、平成25年度10項目とそれぞれ大幅に増加していることから、授業への積極的な改善の結果を表しているといえる。

2. 「自立と体験1」の特徴的授業と技能についての評価

「自立と体験1」の授業内容での特徴は、「学部横断による学生の交流」により「少人数クラス」単位で、「ポートフォリオを活用する」「グループ学習」である。この活動を通して、学生が主体的に学びながら、大学生生活高学年次でも活用できる技能を習得する要素が多い。以下の、表2は、初回と最終回に実施した各種技能を肯定的に捉えた比率である。

表2. 1回と15回での各種技能の肯定的意見の割合

「敬意・関心を持って他者の話を聴くことができるか」

平成22(2010)年		平成23(2011)年		平成24(2012)年		平成25(2014)年	
第1回	第15回	第1回	第15回	第1回	第15回	第1回	第15回
88.3%	90.2%	90.2%	92.0%	90.0%	93.2%	90.5%	92.6%

「自分の意見を文章でわかりやすく表現できますか」

平成22(2010)年		平成23(2011)年		平成24(2012)年		平成25(2014)年	
第1回	第15回	第1回	第15回	第1回	第15回	第1回	第15回
32.2%	58.0%	27.0%	54.9%	27.2%	54.5%	28.3%	50.2%

「自分の意見を筋道を立てて話すことができますか」

平成22(2010)年		平成23(2011)年		平成24(2012)年		平成25(2014)年	
第1回	第15回	第1回	第15回	第1回	第15回	第1回	第15回
33.7%	62.0%	33.7%	63.8%	33.9%	65.2%	36.8%	64.7%

「学生時代にすべきことを考えていますか」

平成 22 (2010) 年		平成 23 (2011) 年		平成 24 (2012) 年		平成 25 (2014) 年	
第 1 回	第 15 回						
79.8%	83.9%	81.0%	86.7%	82.3%	89.5%	83.5%	88.3%

「大学の図書館の利用方法をしっていますか」

平成 22 (2010) 年		平成 23 (2011) 年		平成 24 (2012) 年		平成 25 (2014) 年	
第 1 回	第 15 回						
27.3%	90.2%	49.6%	91.2%	35.5%	88.0%	50.3%	90.0%

* いずれも「とてもそう思う」「そう思う」と回答した学生の割合である。

何れの項目においても、初回よりも最終回で大きな伸びを示し、高い評価を得ていると言えよう。大学入学直後からの15回の「自立と体験1」による効果はあるが、更に学科独自の指導も含まれての結果であることも含まれる。

(2) 授業の特徴

下記表3では、「自立と体験1」の授業の特徴とする項目について、最終15回目に問うている。それぞれの設問に対する年度毎の回答は以下のとおりである。

表3 「自立と体験1」授業での特徴に対する肯定的回答の年度別割合

	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度
「ポートフォリオ」は役に立ちましたか	80.0%	75.5%	79.3%	75.8%
「少人数クラス」は役に立ちましたか	89.9%	90.0%	91.8%	91.6%
「グループでの学習活動」は役に立ちましたか	89.2%	90.6%	91.4%	92.0%
「他学部・他学科の学生との交流」は役に立ちましたか	92.6%	92.7%	93.3%	92.7%

* いずれも「とてもそう思う」「そう思う」と回答した学生の割合である。

4年間を通して「ポートフォリオ」は75%以上の学生が役立ったとしている。「少人数クラス」「グループでの学習活動」「他学部・他学科との交流」については、90%の学生からは、「役立った」と肯定的に受け取られている。この特徴ある授業を通して、上述の高い学習効果をもたらしているといえる。

3. まとめ

ここでは、「学生による授業評価の授業改善への活用」「学生の教育効果の検証」(岡田聡志,2011年.p.112)を中心として、「自立と体験1」の学生アンケートから、4年間を振り返り現状について考察を行った。4年間を見直し、学生の協力による膨大なデータを見返し、改善への努力の結果が表れているものといえる。こうした、最初の出発より、年々充実する内容への変化と高い学習効果をもたらした背景には、全学的な協力と理解があって成り立ったものといえる。大学職員からのアンケートでも、『普段、心の中で思っていることをあえて新入生の前で言葉にすることで、大学職員としての自覚を再認識することができた』との声からは、全学での取り組みによる効果を表す一例であるといえる。

学生からも、『自立と体験を終えて、他学部の人たちとのかかわり、聴くことのできないような話をしてきて貴重な体験となりました。グループでの活動などでも話し合いをスムーズに行うことができ、大学の他の授業

では体験できないようなこともできました。これからの大学生活で自立と体験で学んだことを活かしていきたいと思
います』が、自由記述欄に記入されている。学生の自由記述欄には、2010年 971件、2011年 1337件、2012年 1387件、
2013年 1463件の記述がある。これについての分析も必要であり、今回は、単純集計を主とする考察であり、未だ十
分に考察できているとは言い難い。これは今後の課題とする。更に、学内の他の資料とも関連させて考察することも
課題である。

(未完)

参考文献

1. 沖清豪・岡田聡志編著「データによる大学教育の自己改善」学文社、2011年
2. 中井俊樹・鳥居朋子・藤井都百編「大学のIR Q&A」玉川大学出版部、2013年